

# ブルキナファソらしんど!?

勝部ちこ  
Chiko Katsube

渡航目的の重要性、緊急性を鑑みて、芸術家、制作者に対して、国外への渡航費を助成するプログラム「フライト・グラント」を当財団が2014年度より試行版として開始している。最初の助成対象者で、西アフリカのブルキナファソのフェスティバルに参加した勝部ちこ氏にご寄稿いただいた。

(編集部)

## CIすごろく世界旅行!

ブルキナファソ、という国名。正直、馴染みがありませんでした。2012年夏にマダガスカルダンスフェスティバル、l'Trotraで出会ったブルキナファソ人アーティスト、オリビエ・タルパガにInternational Nomad Express Multi Art Festivalに誘われた時は、まだ半信半疑。コンタクト・インプロビゼーション(CI)は確かに世界的に広がりを見せるダンスですが、アフリカで私たちがCIの一端を担うことになるとは想像もしていなかったのです。そもそもご縁は、東京→韓国→マダガスカル→そしてブルキナファソへ。それぞれの場で出会った人が繋げてくれて、まるで「CIすごろく世界旅行!」

それにしても、今回の任務ほど、事前のやりとりが少なかったケースはありません。日程も内容も対象もほとんど取り決められず、しかも手に入るガイドブックはないので旅先の情報が乏しい。ただただ、黄熱病の予防接種を受け、ビザを申請し、蚊帳と国旗を買い、前日真夜中までかけて万能梅エキスを作り、マリアの心配をしながら旅立ちました。2014年5月23日の事です。

Ouagadougouと書いてワガドゥグーと読む首都の空港に真夜中に辿り着いたら、オーガナイザーのオリビエが、音楽家一人とウガンダからのダンサー男子三人を引き連れて迎えにきてくれました。宿舎へ向う車の中では、私たちが歓待する音楽が即興で始まります。その歌のエネルギーの凄い事! シンプルかつストレートな喜び伝達手段。私はいつ以来していなかっただろう、と振り返ります。

## 街の様子、暮らし

街は、赤い土ぼこり。主要な道は舗装されていますが、枝道は全て未舗装。往来には、鶏、ヤギ、牛、犬、たまに猫、馬、いろんな小鳥、、、道路に面してバラックのような店が並びます。そんな店を、現地の人たちは「ブティック」と呼びます。



子どもの遊びは工夫して創作 Photo: 鹿島聖子

裸足の人は比較的少なく、だいたい皆、同じようなレベルで生活しているように見えます。路上生活者も少ないし、子守りする子ども、若すぎる母親、物乞い、押し売りもあまり見かけない。

はにかみながらも笑顔が滲み出す子どもたちが走りよって来て「ボンジュール!」と声を掛けてくれました。疑う習慣の付いた自分を恥ずかしく思いながら返事を返します。「この国の人々は素朴でいい人たちなんだ」と安堵しながら。

ブルキナファソの首都、ワガドゥグーで見るのは、決して豊かな暮らしとは言えないが、悲壮感のまったくない人々でした。目立った産業や観光資源がなく、ビジネス客、観光客はほとんど見かけない、そのような国でこそ守られた大切な物・心があるのではないかと想像します。江戸時代の終わりに西洋人がやってきて、日本人の体型や体力、質素な暮らしぶりと笑顔に驚いたという話を思い出しました。

往来は、くたびれた車とそれの3倍くらいの数のオートバイが行き交います。その100%がノーヘルメットで半数が二人乗り。ぎよぎよと思ふ暇もなく、自分にも後座席にまたがるチャンスがやってきました。公共交通機関がなく皆が自力で移動する街では、旅行者は集団輸送か、バイクの後に乗せてもらうしかありません。人生初のバイク、ノーヘル、二人乗り。前で運転するのは初めて出会った現地のダンサー。信号待ちで周りをバイクに取り囲まれた時、発進と同時に荷物を引っ張られるような事件に出会うかも、と最悪な事態が頭をよぎります。しかし私は無事でした。何も悪い事は起きず、安全に送り届けられ、後にはふらつく身体とやや興奮気味の自分がいました。

## フェスティバルの実態

今回のフェスティバルは、自分たちにとっては確かに我慢大会の20日間でした。

- 1) 事前に分かっている情報の少なさにより、気楽で良いけれども準備のしようがない
- 2) スケジュールがあまり綿密ではなく、よく変更する
- 3) 公共の交通機関がないので団体行動を余儀なくされ、時間はセットされるが、守られたためしがない
- 4) 食事の担当者が不在、いつどんな食事が取れるか不明。数日、同じメニューが続き、あげくは残り物だけで済まされる事もある
- 5) 暑さと食生活の差などから、一人ずつ外国人がダウン。マリアにかかる人も
- 6) 毎日必ず起きる断水と停電。冷蔵庫の中のものは、どれも信用出



この後、走りよってきて「Bonjour!」と握手 Photo: 鹿島聖子



フェスティバルの主催者、オリビエ・タルバガ(右から二人め) Photo: 鹿島聖子



アフリカダンスのクラス Photo: 鹿島聖子

来なくなる

7) ドアに鍵が無い、灯りが点かない、紙が無い、水が流れない、便座も無い、のがトイレの普通

以上、マイナス面を書き連ねると、おそらく1頁を越えるかも知れません。それでも、今回のフェスティバルに参加した事が大いにプラスに働いていると思えるのは、地元の人々の素直さ、明るさを知った事でしょうか。日本人には持ち合わせないスタミナや、ダンスが好きでたまらない!と体全体で表現する人々。音楽も同様。時空間を満たしきった音の洪水に、リズムに合わせるなどという次元ではなく、ダンスと音楽、そして生きているという事が一体となっている。これはこの国に来ないと目撃/参加/体験出来なかった事なのです。

ブルキナファソの人々は、年長者を敬う習慣が身に付いていて、礼儀・礼節も息づいているようです。ウガンダからの若者には失われた礼儀作法を、ウガンダよりもおそらく未開発であろう国、ブルキナファソの人々は持ち続けている。例えば、こんなシーンをよく見ました。後から部屋に入ってくる人は、そこに既にいるひとりずつ全員に挨拶をしていく。互いの指で音を出す、ちょっとした振付のような粋な握手と、言葉掛けと笑顔。この習慣、マダガスカルでも見ましたが、何度見ても、凄いなあ、いいなあと感じます。時間が掛かるけど、そんな事は気にしない。習慣であり礼儀作法。真似をしようとしても、即座にはできないものです。少々恥ずかしい気持ちになりました。

さらに、私たちから見て、食糧事情が十分ではないと思えるのに、彼らの身体と運動能力、スタミナには目を見張るものがあります。日中の気温が40度以上にもなる暑さの中、激しいダンスを長時間続けても、音を上げる人はいません。身体中から大汗をかいても、ほとんど体臭はなく、綺麗なサラサラの汗なのでしょう、終わって着替えば、みなスッキリオ洒落な人たちです。

## Nomad Express Festivalのメインメニュー

アフリカダンスのクラスは、さすが本場。身も心も大きな先生は、昔、アルヴィン・エイリー舞踊団にも所属し、パリでの芸術活動の後、本国ブルキナファソに戻り、若手ダンサー育成の為に自費を投じてダンススクールを作り上げたイリーナさん。伴奏の音楽家が7人編成。贅沢な音環境。その音に負けない大声の先生とスプリンクラーかと思う程、汗を吹き飛ばしながら踊るダンサーたち。クラス構成もあっぱれ! 大きな拍手とみんなの笑顔で終了する。

他には、丁寧なボディーワークのクラスや、コンテンポラリーとアフリカの変なミックスのクラスや、アメリカ人講師のリリース系コンテンポラリークラス。

そして、私たちが任されているCIのクラス。経験者は多くなく、基礎から始めます。が、この暑さ。接触したり、床をスライドしたりはまず不可能。CIの中でも接触を絶対とはしないタイプのワークを選びます。終わってから感想を聞けば、アフリカダンスは、大地を踏みならしたり、音楽と動きで時空間を満たすようなタイプだけど、この日本人のダンスは繊細で静かで柔らかい、だから気に入った、と。確かに、私たちの永遠のテーマは、「CIに於ける間」ですから引算してなんぼの世界です。両者、ない物を分かち合う、とても良い関係かもしれない。

オーガナイザーが今回のフェスティバルの柱のひとつに掲げていたものに、「メンターシップ制度」があります。海外からの講師に、現地の若手アーティストを1名ずつ組み合わせ、メンター(育成者)とメンティー(被育成者)の関係ができあがります。それぞれが個別でレッスンやディスカッションをし、できればその関係を今後も続けていきたいと思います、というものです。

私には、アジズという男の子のダンサーが組み合わせられました。英語の不得意な彼と、フランス語が「ジュヌコンブロンパ〜」の私は、苦勞しながら会話を楽しみ、お互いのダンスを見せ合い、一緒にインプロセッションを試みました。若いながら、非常に才能を感じるアーティストです。素朴にして鋭利な芸術的感覚。クレージーだけど健康的。特に仕込まれたダンステクニックというものは感じないのに、綺麗な肉体に度はまる運動と精神性。ブルキナファソにはこのようなダンサーがいるのだ、と感動を覚えます。彼らからすれば、日本のダンサーはとてもミステリアスで不思議な感覚を持ち、かつ経済的にも恵まれているので可能性がたくさんある、と思うのでしょうか。確かにそうです。今回のメンターシップでの収穫と責任は、ブルキナファソやアフリカの若手に、日本文化、習慣、精神、など良い所を伝え、彼らの驚くべき才能を日本人のたちに紹介するチャンスを作る、ではないかと思っています。

公演で、私たちのデュオ作品を披露した所、前述のイリーナさん(この国の王族の血を引き、現大統領にもプライベートで電話する度量も声も人間も全てが大きな人物)が大層気に入ってくれて、彼女がオーガナイズする別のアートフェスティバルに招待する! と言い出しました。

嬉しい反面、やや複雑。脆弱なインフラ環境にも気候にも大丈夫な覚悟が必要だわ、ついでに言えば、ブルキナファソまでの渡航費って半端じゃない。今回は本当に運良くセゾン文化財団の試行プログラム、フライト・グラントが頂けたけれど、それ無くしてはお金の準備期間には足りないわ、とのこちらの懸念もなんのその。早速、在ブルキナファソ日本大使館にコンタクトを取り、旅費の申請をしているらしいと聞きます。その後、西アフリカから発生のエボラ出血熱の騒ぎで、この話の行方はどうなった事でしょう。

かくして、即興的に始まったアフリカとのご縁は、まだ続きがあるようです。強靱な胃腸と体力、フランス語会話力を身に付ける、が間に合いますように!!!



Photo: 鹿島聖子

勝部ちこ (かつべちこ/大阪-東京-NY-東京-鹿児島)

お茶の水女子大学・大学院で舞踊教育学を修めた後、ニューヨークにダンス留学。ふれあうことから始まるダンス、コンタクト・インプロビゼーションを軸として活動を展開するグループC.I.co.を2000年春、東京に設立。以来、国内外に活動の場を広げ、「コミュニケーション」「身体」「社会性」について研究と実践を続ける。2012年夏、C.I.co.は鹿児島県伊佐市に転拠。2013年10月には伊佐市、霧島市、東京を会場にアジア4カ国と協同するCI国際フェスティバル、I-Dance Japanを開始。共著「協同と表現のワークショップ」(2010 東信堂)の中でCIワークショップの事例紹介。現在、一般財団法人地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト。

<http://www.ci-jp.com>

Article—3

## みんなで一緒に舞台を楽しもう!!

～特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み～

廣川麻子  
Asako Hirokawa

### 演劇とのかかわり

耳が聞こえない人が演劇をどのように?と思われるかもしれませんが、聴覚障害を持つ私が演劇に関わるようになったのは、実は幼少時にさかのぼります。聴こえない子どもたちのための民間教育施設「母と子の教室(現・聴覚障害児とともに歩む会トライアングル)」の卒業生を中心に結成された「難聴児の劇団エンジェル」での活動が演劇との出会いでした。人前に立って演じることの楽しさから高校演劇での活動につながり、さらに和光大学での学びが大きなきっかけとなりました。

和光大学では、障害を持つ学生が多数入学しており、その様態は実にさまざまでした。見えない人といっても、全盲、弱視、光だけ見える人、など幅広いものでした。障害のある人、ない人が互いに助け合い、支え合って生きていくという建学精神を継承して、それが校風となっていました。そのため、学生生活の風景の中にごく当然のように車いすを使う学生がいましたし、スロープがないところは学生が協力し合って運んでいくというような雰囲気でした。

そのような中で、障害者問題研究会というサークル活動を通して、「誰でも楽しめる演劇づくり」について考えるようになりました。大学4年のときに日本ろう者劇団に入団し、俳優としての活動の傍ら、時折、制作事務を手伝うようになったことから、企画全体について考えるようになりました。

### 英国での体験

ご縁があってダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業第29期生として英国ロンドンにて2009年9月から1年間、さらに自費で滞在し2010年11月に帰国しました。

ロンドンのフラットでルームメイト4名とともに暮らしながら、Graeae Theatre Company (以下グレイアイ)を拠点に、さまざまな団体に研修を受けました。グレイアイの芸術監督Jenny Sealeyが今回の研修コーディネーターを引き受けてくれました。彼女との出会いは、2007年10月エイブルアートジャパン主催公演「飛び石プロジェクト『血の婚礼』」に出演したことがきっかけでした。聾者でもある彼女は聾者、盲者、車いす利用者がプロの「健常」俳優とともに作品を作り上げ、誰にとっても分かりやすい芝居作りをする方針を持っており、そのやり方はまるで、大学祭で障害者問題研究会として披露した「手話劇」のようでした。みんなが参加出来る演劇をもっと学びたいと希望し、お陰で7か所、のべ23件の研修を受けることが出来ました。そのほかにも自主的にセミナーやワークショップ等に参加しました。

また英国では情報保障(アクセス)が徹底されており、劇場の責任で1公演の間に必ず手話通訳・字幕・音声ガイドを付けることになっています。そのため60本以上の観劇をすることができました。うち40本以上になんらかのアクセスがありました。ウェストエンド等で上演されるような『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』などの有名ミュージカルを手話通訳や字幕付きで、まさにリアルタイムで楽しむことができました。それと同時に、日本での観劇環境の貧しさを思いました。2009年当時の日本では台本貸出すらも断るところが多く、小劇場に出演する知人を通して個人的に見せてもらうという形が殆どでした。一部の団体が字幕をつける試みを行っていますが、その費用は全額劇団負担となっています。英国では劇場責任といっても政府からの援助があり、また観客サービスの一環という考え方が普及しており、障害を持つ人の存在を観客動員に結び付けたさまざまな取り組みを行っていました。

とりわけ衝撃を受けたのが、アクセス情報を提供する仕組みが整っている事でした。ロンドン劇場組合が運営している公演情報サイト「Official London Theatre」のコンテンツのひとつとして「アクセス」というページを提供しています(文末ご参照)。手話通訳、字幕、視覚障害のお客様のための音声ガイドがついた公演情報を一覧にしており、公演詳細だけでなく、予約も直接出来るようになっています。ジャンルや日時で絞り込み検索もできます。また、車いす利用者のために